



The Cinema of UCG Choice

“こいつが犯人”とほのめかす、カルマン・ギア1200

『ゾディアック』

6月16日(土)公開

丸の内プラザールほか全国にて

アメリカ史上初の劇場型殺人鬼ゾディアックは、自ら呼び名とトレードマーク(○に十字を重ねたもの)を作り、人を殺してはマスコミに犯行声明や暗号文を送り、「1面に載せないとまた殺す」と脅し、1969年の登場から70年代に渡って世間を騒がせ続けた。その自己顕示欲のカタマリぶりを表す最も顕著な例は、サンフランシスコ郊外のペリエッサ湖の事件だ。犯人はマンガさながらに、自分のマークを縫い付けた頭巾をかぶってカップルを襲った。女しか殺さなかったのは、この話を世間に伝える人間を残すためだ。さらにその回を含めた3つの殺人事件の日付を、彼らが乗っていたカルマン・ギア1200の横っ腹にマジックで書き残した。記録に残っている事実である。

映画は事件の間に魅入られた男たちの目を通じて、真相に迫ってゆく。その過程で「コイツしかいない」と思える最重要容疑者が浮上するのだが、出てくるのは状況証拠ばかりで物的証拠がない。焦るサンフランシスコ市警はどうかこうにか裁判所を丸め込み、やっとのことで家宅捜索の令状を手にいれて容疑者のトレーラーハウスに踏み込む。そこへ留守にしていた本人が、これまたカルマン・ギアのコンバーチブルで戻ってくるのだ。容疑者はおしゃれでもない40がらみの禿げ上がった工具で、ライフ

ルや拳銃を何丁も持っているし、何しろ住居がトレーラーハウスである。どうみても“デザイン命”のカルマン・ギアに乗るようなキャラクターではないのだが、それでも監督のデビッド・フィンチャーは敢えてこのクルマで登場させた。“この男が犯人”とほのめかしているのである。

映画の冒頭には、ゾディアックのもう一台のクルマが登場する。事件が起きたのは独立記念日の夜。人気のない駐車場でイチャつくカップルのクルマの後ろに、別のクルマが鼻先を近づけて止まる。ヘッドライトの反射が照らし出すのは、グリル中央の“走る馬”——マスタングだ。続く次のシーンは、犯



行声明が新聞社に届く場面。カメラは声明文がたどる道を追うように、建物の外から中へ、メール室から編集部へと動いていくのだが、外から中に入る直前に、一台のマスタングがスーッと画面を横切るのだ。もちろん、カルマン・ギア同様に、偶然ではあるまい。こんな細部まで凝りに凝る映画監督のマニアぶりは呆れるばかりだ。誰も気づきやしないのに……と気づいたこっちが言うことでもないのだが。

渥美志保

映画ライター、コラムニスト。数々の人気雑誌に映画関連のコラムを執筆している。映画に登場するクルマで最も好きなのはポンドカーのアストン・マーティン。